

宮古圏域の「著書・論考」をたずねて 第二部 文芸と芸能

仲宗根 將二

1. もりおみずき作品集『あかねちゃんのふしぎ』

高校で教鞭をとる傍ら童話の創作に精進している著者の初めての作品集である。表題の作品とともに十一編をおさめている。

著者の目はつねにけがれのない幼いもの、弱いものにやさしくむけられている。全編少しも力んだところが無い。にがりのない子どもを目をとおして、命、勇気、希望、平和、生きるとはどういうことなのか、やさしく作品世界にいだない、問いつづけている。ほとんどの作品は、「ふくふく童話大賞」などの入選作品である。

序文もあとがきもなく、奥付にも創作歴が記されていないので、いつからどのような動機で童話に手をそめるようになったのか、知る由もないが、収録作品に付された入選歴を追うことであるといどうかがうことができる。それはまた著者の並なみならぬ精進ぶりを示す証にもなっているようだ。

表題でもある巻頭の「あかねちゃんのふしぎ」は、一九九六年、第五回ふくふく童話大賞奨励賞の受賞作品でもある。「ノーマン」は一九九七年、第六回の同じく奨励賞、「お母さんごっこ」は一九九八年、第十回琉球新報児童文学賞、「さようなら、オンベラの星」は一九九九年、第八回童話ふくふく童話大賞優秀賞、「クリスマススキックボード」は二〇〇〇年、第九回ふくふく童話大賞同じく優秀賞、二〇〇二年、ついに「砂漠にて」で、第十一回ふくふく童話大賞の栄冠をかちえている。この年は、「希望く子供たちの人頭税物語」で、平良市制五十五周年・人頭税廃止百年記念事業の「ひらら戯曲大賞」

にも輝いている。年を重ねるごとに読者の心をつ作品をうみだす精進ぶりを示しているといえよう。

巻末に、ふくふく童話大賞選考委員の屋比久功氏が「発刊によせて」を記している。著者との初の出会い、一九九六年の第一印象について、「そよ風のように、もりおみずきさんはそこに佇んでいた。穏やかな笑顔がまるで純な少女のよう。…」と。著者もりおみずきこと友利昭子さんを評している。疑いもなく作品世界はその反映といえよう。作品ごとに添えられたのひなひろし氏挿し絵も相乗効果を現して好感をそそる。

いっそうの精進を願うとともに宮古にひとりの童話作家が誕生した喜びを読者とともにわかち合いたい。B六判、一六七頁、一五〇〇円、ボーダーインク、二〇〇三・七・一〇発行。

(「宮古郷土史研究会会報」一三八号、二〇〇三・九・五)

2. 新里幸昭『宮古歌謡の研究』

四十余年にわたって宮古の歌謡―文学について調査・研究をつづけている名桜大学の幸昭教授が二〇〇三年の『宮古の歌謡―付宮古歌謡語辞典』につづいて、本年三月、『宮古歌謡の研究』と題して上梓された。一九七二年以降現在までに発表した論文十五編を、発表年をはずし宮古の歌謡全体が史的に通観できるよう収録している。ここで著者のいう「宮古の文学」とは、「宮古の島々の方言で口承されてきた唱え物や呪詛的歌謡、叙事的・抒情的歌謡」で、「島の

生活から生まれ、育まれてきた」ものをさし、「現代的創作物」はふくまれていない。

「序にかえて」は、「ウチナーの肝心く沖縄文化に見る三〇年」と題して、二〇〇二年五月九日『西日本新聞』に執筆、同年七月の「沖縄文化協会二〇〇二年度公開研究発表会」で講演したものである。沖縄諸島の古代文学研究は、「琉歌やオモロを軸に、外間守善・西郷信綱らによって展開、『日本思想史大系おもしろさうし』、『校注おもしろさうし』上・下巻(外間)へと深化させ、また、八重山は、喜舎場永珣・上勢頭享らが研究を深め、「八重山民謡誌』『八重山古謡』上・下巻(喜舎場)、『竹富島誌 民話・民俗篇』『竹富島誌歌謡・芸能篇』(上勢頭)となって世に問われている。

しかしひとり宮古の歌謡研究のみは方言の難解さもあってか立ち遅れていた。一九六四年、琉球大学沖縄文化研究所による宮古の総合調査が始まって、慶世村恒任や稲村賢敷が開拓した、ニリー・アグ・クイチャーアグ・トীগニ・シユンカニの歌ジャンルに、外間・著者によって、新たにピヤーシ・フサ・タービを加えた『宮古島の神歌』へと発展させている。さらに著者も加わった外間総編集『南島歌謡大成』全五巻が世に問われた。こうして本土では既に失われた「呪禱的歌謡や叙事的歌謡が、神祭りの場で厳肅に伝承されていた」ことが明らかにされ、奄美以南琉球諸島の古代文学研究の基礎資料が揃い、歌謡の全体像が明らかになった。

そのなかで特に宮古の歌謡は、「日本文学の可能性を開く魅力的な未知の世界を有していることなどが、研究者を魅了し」、その後の数多くの著書・論文につながった、藤井貞和『古日本文学発生論』、古橋信孝『古代歌謡論』、谷川健一『南島文学発生論』、玉城政美『南島歌謡論』、外間守善『南島文学論』、内田順子『宮古島狩俣の神歌』

などで、これらは「南島歌謡の体系化、本土文学との比較研究、文学発生論、歌謡の構造分析、歌謡の唱われる場面の研究」をテーマにしている、という。

ここで著者は宮古・八重山の歌謡研究にとって欠かしてはならない重要な指摘もしている。「歌謡語の研究を疎かにして、歌謡の謡われる場面の研究だけをするのは、歌謡研究でなく、歌謡の謡われる場面の研究でしかない」と。さらに未採択の神歌、手つかずの童歌など「この未開の沃野を耕せば、南島はもとより日本の古代文学ももつと豊かになるはず」だ、と指摘している。

このほか本書収録の論文は、「宮古の文学」「狩俣部落の神祭りと年中行事」「狩俣の神々タービ・ピヤーシをもとに」「宮古の神口と願いの口」「宮古狩俣のウプイビムヌの神歌」「仲間元のタービと祖神祭りのフサ」「御風鎮めのニガリとピヤーシ」「ユピトウシユヌフサ」宮古島狩俣・池間平治家だけに伝承されている神歌「宮古島狩俣の祖神祭りと久高島のイザイホー」「島分けの歌」宮古・八重山の歌「タウガニの発生」クイチャーとの関係において「宮古島のわらべ歌」「池間島の年中行事と神歌」「宮古文学(歌謡)の研究と課題」など、十四編である。

これらの一つひとつを紹介するにはとても紙幅がないので、また、専門でない単なる読者の立場からは遠慮せざるを得ない。ここではきわめて諮意的だが、一般に興味をひきそうな「タウガニの発生」クイチャーとの関係において「にふれることにしたい。「トীগニ(タウガニ)アグ」の発生はいつ、誰によってなど、明らかではないが、一般に広く語られているのは、唐帰りの美声の若者力ニ(金)が歌い始めたのでトীগニ(唐金)という、というものだが、著者はそのような俗説にはふれず、冒頭から「美しい調べを意味する『イチュニ』

に対する『唐が音』ではかろうか」と指摘、さらに「宮古上布の悲しいまでの」美しさ、柔らかさが『糸』であり、伝説による唐に対する憧憬の念を意味するとき、タウガニは『唐が音』でなければならぬ」と強調している。

さらにその発生の源については、外間守善が「南島歌謡の系譜」(『文学』一九七二年五月号)で提唱した、宮古歌謡の史的変遷に依拠し、フサ、タービ、ピヤーシ、ニーリなどの呪禱的・歌謡的から長アーグ、クイチャー・アーグなどの叙事的歌謡、さらにトーガニ・アーグ、シユンカニなどの叙情的歌謡へ変遷していったととらえている。その上で、野崎や狩俣等で伝承されているいくつかのクイチャー・アーグやタウガニを引用しつつ、呪禱的・歌謡的から叙情的・歌謡的への「改作や重なりは、皆無に等しい」が、「叙事的・歌謡に位置づけられるクイチャー・アーグには呪禱的・叙事的・叙情的・歌謡のいずれの要素をも内包した」のもあって、「タウガニの源」は、「クイチャー」に落ち着きそうだと位置づけている。

最終章の「宮古文学(歌謡)の研究と課題」(一九八四年)では、「年々歯が欠けていくように他界なされていく歌謡の伝承者―聞き手を持つていくあの老婆や老爺に蓄積された人生の生の証が、いまも永遠の闇の中に消え失せようとしている」と警鐘を鳴らし、各集落の「歌謡の発掘」とともに「歌謡語を解いていくために、今使用されている方言の記述も急がねばならない」と指摘している。

巻末の「(付表)宮古文学研究史表」には、一七〇七年の「御嶽由来記」から、二〇〇二年の上原孝三「航海をめぐる歌謡くたび。パイ(旅栄え)のアーグについて」等まで収録、著者の永年にわたる宮古の文学(歌謡)研究が、どのようなものであるかを知る上でも貴重な資料になっている。

(「宮古郷土史研究会会報」一四八号、二〇〇五・五・十一)

3. 小禄恵良 宮古音楽『世や直れ』三部作

大学卒業後長く宮古農林高校で教鞭をとり、文筆家としても知られる小禄恵良氏が二〇〇五年十月一日「宮古島市」誕生を記念して、『音楽で島興し世や直れ』第一集、同第二集、さらに十一月一日『文学・音楽で島興し世や直れ』第三集として出版した。第一集は、人物編、宮古音楽略年譜、戯曲「世や直れ」、音楽に関する児童小説「馬場の丘」、あとがきに代えて「天皇陛下行幸啓と城辺(宮古)」、第二集は、続「宮古音楽略年譜」「宮原の川と橋の上から音を探す」音のある風景「伊良部タウガニ大会」「友利明令と平良彦一(宮古民謡の比較)、第三集は「友利明令『宮古民謡』本人自筆の原稿」「クイチャー特集」「アヤグの変遷『根間の主』『東里真中』他」「文芸(郷土文学)作品のダイジェスト版」さし絵・下地明増「賞状・辞令に観る明治・大正・昭和」、以上五編構成で、総頁数はA四版、八四三頁にのぼっている。

第一集の「人物編」は、初代伊良部村長として二十年つとめ、伊良部村の基礎をきづいたことで知られる国仲寛徒の「島めぐりの歌」、ロシア人で日本研究者として宮古の歌謡・言語・民俗等を中央学会に紹介したニコライ・ネフスキーとの関わりに始まって、「那覇で平良音楽学院を開設」している平良勝氏まで一〇四人収録している。田島利三郎、外間守善、杉本信夫、新里幸昭、鏑木隆一、内田順子らの数人を除いて、すべて宮古出身者。音楽との関わりについて、それぞれその特性を示すとともに、本人の文章をとおして理解できるように紹介している。宮古民謡研究で周知の友利明令については、「昭和六年『根間の主』をレコード化」「半世紀前に『宮古民謡』を編集」

などと記し、郷土史研究会員でもある岡本恵昭氏は「宮古あやご研究の第一人者」、上原孝三氏「若手の理論家、歌謡に登場」、新里幸昭「宮古の歌謡研究の第一人者」といったぐあいである。東京都出身で宮古暮らし十余年の松本一徹氏については、「東京の編集者・老いて宮古暮らし」と表示している。城辺新城出身・那覇在住、民謡歌手として広く県外まで知られる国吉源次氏は「NHKのど自慢全国大会に出演『伊良部トীগガニ』を唄う」である。

「宮古音楽略年譜」は、一六三七(崇禎十・寛永十四)年「先島の貢租を人头税に!多良間島で八月御願(首里王府への納税の完納報告を御嶽で実施)それ故『奉納踊り』とも呼ぶ」に始まって、二〇〇二(平成十四)年まで収録されている。各学校の校歌、各民謡大会や音楽コンクール等のプログラム、関連する新聞記事等まで添えている。プログラムは、時代背景を示すかのようにガリ版刷りからタイプ印刷、活版印刷への変遷など、きわめて多彩である。

戯曲「世や直れ」は書きおろしであろう。第一場面Ⅱ1. 慶世村恒任の印刷室(平良の町)、2. 大正十三年六月、3. 「なかうらざ金城商店」の裏座・栄治の部屋、4. 栄治の回想、5. 自室で詩集ノートを開く栄治、6. 大正十三年夏・劇場「新世界」、7. なかうらざ金城商店、8. 夜・イリリの繁華街・料亭「一心亭」、9. 数日後・平良の漲水港、10. なかうらざ金城商店、11. 自室の金城栄治、12. 同・応接間・歌詞の「殿城」が議論となる。13. 大正十三年七月二十六日「宮古神社鎮座式」、14. 大正十四年七月、宮古教員養成所(宮古支庁内)、15. 教員養成所から「日の丸旅館」まで、16. 布干堂(平良)、17. 昭和二年十二月、なかうらざ金城商店、18. 東仲の川平家・外間座おたけと隣接、19. 昭和三年十月宮古中学校誕生祝賀の全郡連合運動競技大会(馬場)。第二場面「金井喜久子の巻」Ⅱ

20. 平良の町・川平家、21. 回想(明治九年二月)親越坂の「博愛記念碑」建立、22. 回想(明治二十六年)刀はなくなり、髪は切りの世替り、23. 明治の終わり・平良女子小の校庭、24. 大正十四年・県立一高女(那覇)、25. 昭和四年、26. オーケストラがシューベルトのセレナーデの前奏を始める、27. 中野劇場(東京)・喜久子のアルバイト先、28. 昭和十三年、29. 昭和十六年十一月十一日、日比谷公会堂、30. 昭和二十二年七月・北小学校、31. 昭和二十二年十一月・東京比谷公会堂。第三場面Ⅱ32. 東京から宮古に舞台を移す、33. 昭和十七(一九四二)年十月「彦一の回想」、34. 大野山(現・植物園)、35. 彦一の回想、36. 復員を待つ兵隊の群れ・歌声は「宮古島夜曲」、37. 部屋でレコードをぼんやり聞く明令先生・曲は宮古民謡「根間の主」、38. ズボンのポケットに両の手を入れて、首をうなだれ歩く明令先生、39. 一九四八(昭和二十三年)七月(北小学校)、40. 友利明令の民謡テープ。第四場面Ⅱ41. 平和祈念資料館・ひめゆり資料館、42. 二〇〇四(平成十六)年十一月二十八日、43. 同日の午後三時・平良市総合グラウンド、44. 慶世村の声、45. 二〇〇四(平成十六)年十二月五日、46. 鎌間嶺公園の広場(平良市)、47. 「ふるさとよ、希望に輝け」、以上。

第二集の「続『宮古音楽年譜』」は、二〇〇二(平成十四)年以降のクイチャーフェスティバル、平良市民総合文化祭・音楽祭、宮古民謡の夕べ、全宮古吹奏楽祭、宮古高校吹奏楽部定期演奏会、民謡コンクール、小・中学校音楽発表会、「金井喜久子の世界」NHK再放送、平良市少年少女合唱団等もプログラム付きで収録されている。

第三集の巻頭に収めた「友利明令『宮古民謡』本人自筆の原稿」は、一九四九年四月一日付の「稿本」で、おそらく活字化されるのは今回が始めてではなからうか。敗戦直後の宮古民政府委嘱・文化

史編さん委員としての労作であろう。第二集収録の「友利明令と平良彦一(宮古民謡の比較)」と対照して読めばいっそう興味をそそることであろう。民謡から現代音楽まで宮古の音楽全般が網らされている。(「宮古郷土史研究会会報」一五二号、二〇〇六・一・一二)

4. 小禄恵良 宮古島市 音楽史年表(その一)

宮古を主題にした多くの著書・論考を発表している小禄恵良氏が、今度は「古稀」記念に『宮古島市音楽史年表(その一)』を上梓された。宮古地域に根ざしながら国・県も視野に入れ、人物はじめ関係写真等も取り入れた「音楽史年表」は、本書が嚆矢とされよう。氏ならではの力作である。実演家はもとより、先行研究者の諸論考も必要箇所抄出引用されており、研究者にとつても貴重な資料となる。

「まえがき」に、本書著述の発意から、執筆、上梓へ至る経緯等について、一四〇〇字でいどではあるが、「下里一〇八一 歴史資料館『布干堂』にて 小禄恵良」の署名できわめて明快に記している。

1. 『琉球の民謡』に触発

著者はとある日、那覇の古本屋で金井喜久子の『琉球の民謡』(一九五四年)をみつけ、宮古出身の金井が「琉球民謡の起源と変遷を説き、琉球音楽の特質を記述してある」ことに、「新鮮な驚きを覚え」た、「もつとも心躍らせたのは、目立たないように『琉球音楽史年表』が六七〜八二頁に挿入されて」いて、「琉球音楽の根っこに存在する『オモロ』の神歌に気」づかされ、「同時に三線の基礎を築いた琉球音楽中興の祖・湛水親方(幸地賢忠)、野村流・野村安造の名前を覚え」、「さらに「一七〇一年宮古島旧記なる、宮古古謡数篇あり」の記

述に注目させられた、と記す。

『平良市史』第三巻資料編1「前近代」(一九八一年)に収録された「御嶽由来記」の「仲宗根豊見親の妻ら首里城であやぐ・くいちゃ踊りをする」や、「雍正旧記」の「外間座御嶽のクイチャ踊り」は、金井の年表では「見えなかった世界を深め、知識を高めてい」ったと明記している。

2. 現況への認識

一九八二年六月、沖縄タイムス社の文化と思想の総合誌『新沖縄文学』(季刊)五二号の「宮古のアヤグ五十有余年」、同年七月、那覇出版社の又吉真三編著、写真入り『琉球歴史総合年表』によって、「宮古音楽史年表」執筆への意欲を高めていく。さらに一九九二年三月、同じく同出版社から『琉球芸能辞典』が出た。同書中「宮古の民謡」人物の条には、稲村賢敷、金井喜久子、川平朝建、慶世村恒任、平良恵清、平良彦一、高良カナ、棚原玄正、豊見山恵永、友利明令、古堅宗雄……らが紹介されている。あれから二十年、「今なら平良玄幸、国吉源次、来間武雄も加わり、若手の下地暁、久貝哲雄、下地勇も先達に迫る勢いであ」ると、宮古民謡界の現況への認識も示している。

3. 期は熟した……

二〇〇七(平成十九)年、宮古島市体育協会(当時安谷屋豪一会長)に、『宮古島市体育協会六〇周年記念誌』の編集長を委嘱され、現會長の本村博昭氏らとともに県内外に向いて、資料の収集・執筆と多忙な日々を重ねている。体協・スポーツ関係新聞記事等をあさる過程で、「宮古のアヤグの世界を覗く事ができ」、「よし、次は音楽史年表だと新たな挑戦を始め。パソコンを毎日打ち続け」たという。著者の奮闘振りが目にみえるようである。

二〇一〇年三月、波照間永吉県立芸大教授を編集代表とする国立劇場おきなわの『琉球沖縄芸能史年表(古琉球く近代篇)』が刊行された。「金井喜久子の『琉球音楽史年表』以来の感動を覚え」るほどに共鳴した著者は、「いよいよ期は熟した」ことを痛感し、パソコン打ちに集中して二年、「古稀」記念と銘打つての、本書の上梓である。

4、演奏家と研究者

「宮古歌謡の系譜①」には、写真入りでタテに、演奏家の金井喜久子↓友利明令↓クイチャーフェスティバル・なりやまあやぐまつり・伊良部トーガニまつり、ヨコに、研究者の田島利三郎「宮古島の歌」、八〇年を経過↓外間守善・新里幸昭『南島歌謡大成(宮古篇)』を掲げている。

「宮古歌謡の系譜②」には、上段に『宮古史伝』『注釈曲譜付宮古民謡集解』の稲村賢敷ら研究者を並べ、下段には、宮古民謡協会、宮古民謡保存協会、在沖宮古民謡協会、古典音楽宮古支部など、今も活躍する演奏家団体をおいている。

5、五年ごとに改訂

次頁以降が「琉球・沖縄・宮古」を網羅した音楽史年表である。冒頭に「おもろさうし』巻十の、沖縄開闢の神話「日神(てだこ大主)の指示で、天降りした「アマミキヨ、シネリキヨ」によって、沖縄の「島々国々が造」られた、「このアマミキヨ(天孫子)はアマベ(海部―漁労民族)のことであろう」、「筑紫の果にあつたという海部(海部の部曲)即ちアマミ族が南下して琉球の島々に渡来したことを物語っているであろう」という説を紹介して、年表につづけている。

六〇七年「隋の陽帝、羽騎朱寛を琉球に派遣するも言語通ぜず」、六一〇年「隋の武貢武将陳稜、琉球を撃つ」、七〇七年「太宰府で南

島人に位を授く」など、中国と日本の文献で年代特定をしている。琉球歴代王統はじめ、一三九〇年の宮古・八重山の中山朝貢、一六〇九年の薩摩支配、一八七九年の廃藩置県、一九四五年の敗戦等の重要歴史的事象のなかで、現代に至る大小様々な音楽祭、児童生徒の音楽コンクールなどを詳細に跡付けている。「その一」としたのも、今後「五年越に改訂版を世に出す」(「まえがき」)という著者の姿勢を明快に示していて好感が持てる。

(「宮古郷土史研究会会報」一九二号、二〇一一・九・一〇)

5. 平良重信『宮古芸能の系譜』

平良の市場通りで宮古民謡研究所を主宰する鏡原出身の平良重信氏がこのほど『宮古芸能の系譜』を刊行した。四十余年来、本業の時計商の傍ら宮古民謡の研究・普及にたずさわり、既にいくつもの『声楽譜付 宮古民謡工四』や『解説付 宮古民謡集』、CDなどを上梓しているが、こうした活動とおして宮古民謡の系譜についても関心を深めるようになり、執筆を始めて三年ようやく刊行にこぎつけたものである。

著者は民謡をとおして多くの出会いがあり、「工四」をはじめ多くの資料、情報も集まるようになった。これらの資料から、「古代から現代まで民謡を継承し、研鑽を積み重ねてきた先達への感謝の念が湧き」、これらの資料をまとめることで、これから民謡を学ぶ人たちが、「宮古の先人たちによって育まれてきた歴史にふれ、さらに今後の宮古民謡研究の一助になれば」との思いがつのつての刊行である旨「はしがき」に記している。

全巻構成は、宮古民謡のあらまし、「宮古民謡」研究の先駆者、宮古民謡保存協会・組織の流れ、現在の宮古民謡保存協会役員及び顧

問・理事・教師、島唄の継承と普及にとめる宮古民謡協会、宮古民謡を舞台芸能に昇華・舞踊部門、謡に彩りを添える器楽部門、伊良部トীগニ大会の歩み、古堅宗雄が育てた在沖宮古民謡協会、宮古民謡楽譜及び工工四の流れ……と、宮古はもとより県内外を網羅した宮古民謡並びに関係団体の全般にわたっている。協会等の組織については役員・師範・教師ばかりか、会員に至るまで顔写真(五〇〇余点)を添えての編集である。

現在の宮古民謡保存協会につながるであろう宮古民謡団体の系譜は、一九四八(昭和二十三年)、古堅宗雄らによって結成された宮古民謡研究会から始まるとみなしている。一九六七年、平良玄幸らの宮古民謡保存研究同好会、一九七三年、棚原玄正らの宮古民謡保存研究会、一九七八年、下地玄一、一九八〇年、上田長福をへて、一九八七年、又吉正春らの宮古民謡保存研究協会、一九九一年、友利香月をへて、一九九三年、平良重信らの宮古民謡保存協会、一九九七年、下地栄、一九九八年、平良重信再任、二〇〇二年喜屋武稔と変遷している。時にこれらの組織は重なり合うこともあったようで、その上、協会(研究・同好)に所属しつつも、棚原玄正らの漲水民謡クラブ(一九六五年)、伊波義雄クラブ(一九六七年)などの小グループ活動もみられる。著者自身の略歴によっても錯綜していることがうかがえる。古堅宗雄・伊波義雄・平良玄幸らに師事しつつ、一九六七年漲水グループに加わり、一九七七年、宮古民謡保存研究同好会(平良玄幸会長)から教師免許、一九八八年、宮古民謡保存研究会(上田長福会長・伊波義雄顧問)から師範免許、一九九三年、宮古民謡保存協会会長就任というぐあいである。

このような事例はかつて郷土史研究会に所属しておられた上田長福ら多くの演奏者の動向からも知ることができる。必ずしも組織が

発展的に名称替えしたとばかりは言えないようである。また、この系譜とは別に、一九七〇年、沖繩本島へ転居した古堅宗雄が七二年に設立した宮古民謡協会の宮古支部が一九八七年結成され、九七年には分離、独立して現在につづく宮古民謡協会(新垣初男会長)の活動もある。

このような複雑な歩みの宮古民謡界の系譜を解明しようと試みた著者の労は多とされよう。著者は宮古民謡の工工四は一九五五年、平良恵清・古堅宗雄・友利明令共編『宮古民謡の工工四』第一輯を嚆矢とみなしている。さらに古堅は一九六六年『歌詞附宮古民謡工工四』第一集で古堅流、翌六七年には平良玄幸『声楽譜附 宮古民謡工工四』上・下巻を刊行して「平良玄幸流」と、宮古民謡に二つの系統が形成されたが、古堅の沖繩本島転出によりそれ以後、宮古の工工四は平良幸流を継承している、とみなしている。さらに巻末には、宮古民謡集の刊行状況も丹念に追跡されている。一九二七(昭和二年)、慶世村恒任『註釈・曲譜附 宮古民謡集』第一輯、一九五二年、平良彦一『楽譜附 宮古民謡集 全』一九五五年、平良恵清・古堅宗雄・友利明令『宮古民謡工工四』第一輯(謄写刷)等に始まって、現在に至る。おそらくすべてであろう宮古民謡集二四点が表紙の写真付きで紹介されている。編著者、発行年月日、発行所が明記されている。宮古民謡に関心を寄せる人すべてにとつて垂涎のものである。出来ればすべて紹介したいが紙幅のつごうもあり、那覇で活躍するお二人、二点に止どめたい。一九六六年八月『歌詞附宮古民謡工工四』第一集を出した古堅宗雄(一九〇三〜八五)は、一九八〇年十月「古堅流宮古民謡協会」名で、『宮古民謡工工四(歌詞附)』、国吉源次(一九三〇〜)は、二〇〇一年八月『源宮古民謡工工四』を刊行している。

本書には拙論も収録させていただいた。民謡は門外漢だが、宮古研究の先達の紹介ということで参画した次第。管見の限りで、「宮古民謡」研究の先駆者―と題して、慶世村恒任、川平朝建、稲村賢敷、平良彦一、友利明令(いずれも故人)ら五人をまとめてみた。事ここに至って、著者永年の珠玉の結晶にいささかなりともお役に立つておればよいがと気になるところである(敬称略)。

(「宮古郷土史研究会会報」一五八号、二〇〇七・一・一二)

6. 友利キヨ『続・言葉を紡ぐ』

平良・荷川取出身の宜野湾市在住・友利恵光氏が亡妻キヨさんの一周忌を記念して、エッセー集『続・言葉を紡ぐ』日々の暮らしの中から『』を刊行しました。三年前に上梓したキヨさんの同名著書の続編をなす、夫婦愛の結晶ともいべき珠玉の遺稿集です。

一九三六(昭和十一年)生まれのキヨさんは、生前の本業は美容師で、若いころから作文が趣味であったようですが、還暦を機に新聞投稿を始めています。両県紙をはじめ、宮古の地元紙等にもほぼ定期的に寄稿し、夫恵光氏はじめ新聞や文芸誌『ばいぬすま文芸』『那覇文芸』等を通じて交友を深める知友らの薦めもあって、これまでの寄稿文を一冊にまとめ、二〇〇五年十一月初めて上梓したものです。「書くことのためのしみ、苦しみ、よろこびを人生の糧として、思いのままなぞってみた」、あるいは「書くことは心の運動」と明記しているように、日々の家庭生活のあれこれから、ふる里宮古のこと、自然破壊、イラク戦争など、時事的話題に至るまで幅広い領域を、きわめて平易な文章でつづっています。夫婦の語らいから、義父や孫との会話などは何処にでもありそうな話ながら、思わず引き込まれてしまう、ほのぼのとした筆致です。

「戦争で無一文になった日本を今日の経済大国にしたのはほかでもない今の高齢者たちです。小泉政権は構造改革の名の下に老人や弱者を苦しい生活へと追い込んでいます。米国への思いやり予算などを少し減らすことで高齢者の負担は軽くなると思います(「高齢者に厳しい医療改革」)」「『琉球新報』二〇〇六・六・九」といったぐあいです。

今回の続編は、第一章「友の輪を広げる・投稿」二三編、第二章「元気なみなもと・家族」十一編、第三章「やる気を育てる・健康」八編、第四章「宮古新報エッセー・島の彩」六編、第五章「友からの手紙」十二編、以上五九点で構成されています。恵光・キヨ夫婦の仲睦まじさは衆目の一致するところであったようで、第五章「友からの手紙」に収録された十二編はキヨさんを悼む友情の便りですが、いずれもきわめて感動的です。垣花富夫「夫婦善哉」「言葉を紡いだ」キヨ・恵光さんのほか、池間金蔵、仲里美智子、加藤澄男、幸地努、砂川寛良、仲間定夫、本村繁、村田友子、波平剛、川満一彦、友利敏子さんから一人から寄せられています。A五判、二〇五頁、非売品、総合印刷企画パレット、二〇〇八・一二・九刊。

(「宮古郷土史研究会会報」一七〇号、二〇〇九・一・九)

7. 「宮古毎日新聞」コラム集『行雲流水』第二集

1. 十五年の精選

『宮古毎日新聞』一面記事の最下段に毎週三回(月・水・土)掲載されているコラム「行雲流水」が、このほど精選され第二集として刊行された。早朝新聞が配達されると、真先に同コラムから目を通すという声が多く聞こえるほど、定評あるコラムの集成である。

コラム「行雲流水」は一九九六(平成八)年一月十七日に始まり、

既に十五年の歴史がある。このうち二〇〇五年二月までの分は一四〇編精選され、各項表題を付して見開き二頁に整理編集され、同紙「創刊五十周年記念」として同年八月刊行されている。今回の第2集はそれ以降、二〇一〇年十一月までの分を同じく精選した二八五編の収録である。行雲流水は、「―空を行く雲や流れる水―の如く物事を素直に受け止め、そこから何かを見つけて、郷土の発展と郷土文化の振興に資する」(「序にかえて」)趣旨での命名のようである。

それゆえコラムの一つひとつは宮古に軸足を置きつつ、紙面に現われる県内外の大小あらゆる事柄―政治、経済、産業、教育、文化……が網羅されている。四人の執筆者はいずれもその分野の第一線で活躍している周知の面々であり、分担しての執筆である。仲地清成、友利吉博、仲元浩一、下地和宏氏ら、いずれも宮古高校から琉球大学の卒業生。しかし修業学科は、物理学科、国語国文学科、機械工学科、史学科と違っている。コラムの話題性の多様さはここらにも起因しているよう。もともと毎回わずか六〇〇字そこらの限られた字数であり、表現には少なからず苦労していることであろう。

2、新たに表題を付す

さいわい新聞掲載時と違って、新たに内容に即した表題が付されていてわかりやすい。しかもその時々々の世相を反映していても一回読み切りだけに、どこから読んでも支障がないというのが、この種の刊行物の特質といえよう。

二〇〇五年には、宮古の飲酒法?、観光行政と公衆便所、「緑の街角賞」、衆院「薄氷の可決」。二〇〇六年は、地産地消、サトウキビ生産、地域づくり団体、病院待合室にて、米国の日本改造改革、日本国憲法の理想、基地負担軽減の実態、国家の品格。二〇〇七年は、続く異常気象、「千の風になつて」、米大統領の苦しい弁解、土地を

守る闘い、教科書から消える「集団自決」、政治家の失言。二〇〇八年は、環境元年、尖閣、「えんどうの花」の作詞家、地球温暖化と大国、「憲法九条」の誕生に学ぶ、「きけわだつみの声」、エコアいらンド宮古島、不況期の農業。二〇〇九年は、量販店の戦略に乗せられて、キビ作柄、サニツとひなまつり、みんなが主役・トライアスロン、「一粒の種」、新宮古病院、メディアの社会的責務、基地の重圧、民主党農政の混迷。二〇一〇年は、アメリカ病、葉タバコ、電線地中化で緑喪失、敬老会と学事奨励会、翔南高校と宮古農林高校の閉校、在日米軍の駐留経費、坂の上の雲、外灯よ輝け、市民に役立つ所とは、復帰記念日、報道の付和雷同化、紫紺の優勝旗をもたらした沖尚・興南、海上に響く「なりやまあやぐ」など、大小様ざま。これらはほんの一部である。

3、人物も郷土研究も

ここで人名の付いた表題をひろいあげてみよう。金井喜久子の音楽、木下順二の「夕鶴」、東野圭吾の「手紙」、不屈の人・カメさん、岡部伊都子さんの遺言、村山首相談話と田母神空幕長論文、沖繩と筑紫哲也さん、オバマ大統領登場、麻生首相の予告解散、鳩山政権に期待する基地の県外移設、山崎豊子の作品世界、みやこ少年少女合唱団と宮国貴子さん、『郷土史考』の砂川明芳氏逝く、興座聡さんの「スマイル作戦」、鳩山首相、辺野古移設で日米合意、などがある。

郷土史研究会に直接関係ありそうなものでは、『宮古の歴史と文化を歩く』、県立図書館宮古分館の廃止、歴史から消えるか宮古支庁、『宮古毎日新聞五十年史』と宮古、外間御嶽跡から出土した埋葬人骨、多良間世を祝うスツウプナカ、伝えられる大小の霊石、宮古分館廃止と郷土史講座、ふるさとの地名、博物館友の会の広がり、期待、市立北分館を公文書館にしては、古謡の保存など。

執筆者の専門領域の反映であろうか、どれをとっても短い文章のなかで、凝縮された主題を浮かびあがらせている。珠玉の結晶とも言えそうである。

4. 新聞の品格

『宮古毎日新聞五十年史』と宮古(二〇〇八・一・一四)には、一九五二年「琉球政府」創設以前の宮古は十余種の新聞があったなかで、五五年『宮古毎日新聞』が初の日刊紙として創刊され、「報道を私せず」「社説に公平な主張を」「威信と文化を高めよ」などの祝辞が寄せられたことを記している。これよりさき、二〇〇六年十月二五日「新聞への期待」では、冒頭「マスメディア」は、「社会的重要性、影響力から立法・司法・行政の三権に次ぐ四番目の権力」と呼ばれていると記した上で、読者は「品格のあるバランスのとれた紙面」「平和と人権と民主主義、生活と文化を守る砦としての新聞」を期待していると明記している。社外執筆者にここまで書かせるのも、新聞の見識―品格と言えるものであろう。

〈付記〉現在コラム掲載日は火・木・土に変更されている。執筆者も一部変更しているもよう。

(「宮古郷土史研究会会報」一八五号、二〇一一・七・八)

8. 上地慶彦『マツガニ川柳』

宮古毎日新聞社主催、宮古ペンクラブ主管の第7回平良好児童賞の授賞式並びに祝賀会は六月二日よる、平良・西里のホテルで催された。今回は例年になく候補作品が多く、選考の結果、伊志嶺節子さん(『歌集ルルドの光』)と、上地慶彦氏(『マツガニ川柳』)の二人が選ばれた。授賞式には、お二人の同期生や、関係者が那覇からも駆けつけるなど、会場あふれるほどの盛況ぶりであった。

平良寛新聞社長の主催者挨拶につづいて、『マツガニ川柳』(仲宗根)、『歌集ルルドの光』(友利敏子)の順で「講評」し、松原清吉ペンクラブ会長から「賞詞」と副賞が授与された。ついで宮古島市教育長の祝辞(代読)、祝電披露、花束贈呈、受賞者挨拶があつて、引きつづき祝賀会に移った。祝賀会では、大城裕子宮古島市文化協会長が乾杯の挨拶でお二人の受賞を祝ったあと、玉城洋子さんと佐久川良一氏が、それぞれ友人の立場からお二人の日ごろの精進振りを紹介し、さらに伊志嶺亮、下地徹氏らによる乾杯の挨拶がつづいた。その間にも、お身内や友人らによる、いくつもの踊りや歌が披露され、祝賀会を盛りあげていた。なお私担当の「講評」はおよそ次のとおりです。

1. 今の沖縄を文学的に

今朝の『宮古毎日新聞』の「ひと」欄に、きょうの受賞者のお二人、伊志嶺節子さんと、上地慶彦さんが紹介されております。そのなかで、上地さんは、「川柳は構えるときできない。畑仕事や、新聞、テレビを見ている時などに出てくる」と言っています。つまり、自然体で詠むのがもつともふさわしい、と言っているようです。

また、伊志嶺さんは、沖縄の今の時代や社会について、スローガンの的でなく、文学的に詠みたい、と言っています。ご承知のように、現在沖縄県内には民意に関係なく日米両政府の合意(安保条約)のもと、全国の70%の米軍基地がおかれ、日夜県民の命と暮らしを脅やかす諸悪の根源になっています。これら米軍基地や現在の沖縄のかかえるもろもろの出来ごとをスローガンのでなく、文学としてどのよう歌いあげるか、大いに関心と期待の持たれるところですが、私の担当は上地さんの「マツガニ川柳」ですので、伊志嶺節子さんについてはこのあとの友利敏子さんに譲ることにして、私は今後とも

大いに関心を持ち、期待していると申し上げるに止どめておきます。

2、裏金も運ぶ……

上地慶彦さんの川柳づくりはおよそ二十年、本屋での立ち読みで触発され川柳づくりのめり込んだようです。ご承知のように、川柳は俳句同様、「五・七・五」の十七音のなかに、簡素にして、機知に富み、風刺をかきすなど、俳句とは違ういくつかの特徴を持っているようです。今回初めて「川柳」分野での好児賞です。

巻頭を飾る「裏金も野菜も運ぶダンボール」は、政治的宣伝臭は少しも感じさせません。また、誰れかを非難するような、そんな激しい息遣いもなく、逆に一瞬ではありますが、微かな笑いさえさそうものがあります。だが、次の瞬間、庶民にとっては一生かかってもお目にかかれないであろう、巨額の札束を、上地さんが日ごろ野菜を入れるダンボールに詰めて、政界の裏工作資金入れにしている、こんな理不尽な形で、この国の政治が動かされていると思うと、次第に激しい怒りさえおきるようです。「マツガニ川柳」は、そういう不思議な魅力を持った作品群です。

3、身近く国際的広がり

こうした国の内外を題材にした時事的作品には、「沖繩のこころ汲めぬか永田町」米軍基地全国の七〇%、米軍基地を縮小する気もない政府、「普天間の行方子鳩が迷わせる」鳩山総理(当時)の最低でも県外が新たな波乱を起こしている、「重過ぎる荷物だったか総理の座」国の最高責任者として所信表明したが代表質問に入らぬまま辞任、「愚かにも隣人などと沖繩を」よく言えたものです。「米兵の『綱紀肅正』花一匁」日夜被害をうけているのは県民、日米両政府の無責任さがきわだちます、「アメリカじゃ退役兵もホームレス」ベトナム戦争の英雄(?)も帰国すれば失業者(?)のようです。

身近な人間関係に関わる作品には、「リハビリの友を気遣う廻り道」加齢とともに気になります、「手を挙げて瞬時に気付く人違い」先方も気付いた?、「素直さがオレオレ詐欺につい掛り」人のよさを悪用、「オトリーの飲めるラインの上、中、下」宮古島市の友好都市世田谷区でも流行っている(?),「藍が咲きしのぶも咲いて美香も咲き」ゴルフ無縁でもわかります。沖繩県のゴルフは全国区も超えたようです(?)。

このように『マツガニ川柳』は、国際的広がりから、日常身の話題まで三〇〇余句、ふだん手許において何回でも読んで下さい。読むほどに作者の思いの深さが伝わってきます。上地さんが今後ともみがきのかかった作品を発表するとともに、これを機会に、宮古の川柳人口が増えることを皆さんとともに期待しています。

4、後世に残すべき「小鳩」:

旧平良市議一期、県議三期つとめた下地常政氏は『マツガニ川柳』について、「日常身のものもろ」から、世の大小あらゆる事柄を「的確に捉え、湧き出る情感を奔放な言葉づかいと表現で書き連ねている」と絶賛した上で、「普天間の行方小鳩が迷わせる」について、「日米関係から極東の安全にまで連なる問題を十七文字で鋭く突いたこの一句」は、「いかなる講評をも超え、後世に残すべき極みの作品」(『宮古毎日』六・一八)と高い評価を寄せています。

(『宮古郷土史研究会会報』一九七号、二〇一三・七・一一)

9. 田中政子『風まかせ』

二〇〇八年四月十九日からおよそ二年半、『宮古新報』に表題通りの「風まかせ」と題して連載したエッセイ七四編を一巻にまとめたものである。連載中は折りにふれ愛読していたはずだが、こうして

一つにまとまったの手にすると、またひとしおの感がある。全編をとおして天真爛漫というか、天衣無縫というか、日ごろ毎月一回の研究会で顔を合わせる著者とはまるで別人のようである。あるいはそれこそが著者天性のお人柄なのかもしれない。

一、「風林火山」の甲州生まれ

「風林火山」で著名な戦国武将・武田信玄の山梨県は甲府の農家の出だということだが、その文体や着想等からは首肯できそうもない。むしろ貴人の風格をしのばせているようで、瞠目させられる。

著者は一九三七(昭和十二年)二月生まれ、五人姉妹の長女なのだが、長く独身時代がつづいていたようだ。四〇〇坪もある生家の屋敷の一角に一戸を構え、茶道(江戸千家)と華道(松山古流)を教え、傍らもつばら一人旅をたのしんでいたという。北海道から沖縄県まで全国各地をめぐる、由緒ある庭園をみ、焼物をみ、禅寺等をたずね歩いている。三三歳のときには五〇ccのミニバイクで六四日間かけて日本一周もこころみている。さらには世界各国めぐりである。

四十歳で結婚後は、甲府を離れて大蔵省の東京四谷見附の官舎、八王子、世田谷と移り住みながら、実家に帰省することなく一人旅、「二人旅」がつづけられている。当然のことながら兄、弟らのしがらみもなく、一人旅をとおして、「日々の捌き方、身体の自己管理法、時間、金銭感覚のバランス、他に頼らずの心意気、何ものにも動じぬ度胸」(風まかせ・三三三)を身につけたと自称している。母、ついで夫と六年間も介護に明け暮れたのち、同年中に二人を失い、一年に二回も葬いを出している。さすがに何ごとにも動ぜぬはずの著者もこのときばかりはまいったようだ。「心の彩を失った」と記している。「フラ・ダンス」、美術館めぐり、見残した日本の隅々歩き等を

へて、ようやく本来の自分を取り戻したところで、宮古へ移り住んだということになるようである。

二、出生地甲府と共通する宮古

宮古転住のときの様子を次のように記している。

二年半前、世田谷で浮世を卒業して「一寸隣町へゆく感覚」で(今も同様)羽田から空を飛び、舞い降りた処がこの珊瑚の平らな町であるが、何とも故郷の甲府盆地に似ている空気が。市役所も銀行も図書館も注文通り近くにまとまっていて、驚いたことに氏神さんの宮古神社が故郷の熊野神社、祥雲寺がわが菩提寺「光正寺」同様臨済宗妙心寺派ときている。何やら一気に「東京」が消えて、甲府市朝気町(昔々ヤマト・タケルが命名した地名)の昔に戻った。アパマンショップ宮古島店の久貝君が車で連れてきてくれたのが希望通り「史跡保存地区」のド真中、東仲宗根の平良アパート二階であり、ドアを開けた途端「フワーツ」と遠い昔が甦ってきた。これはこれはふるさと甲府を通り越して昔々母の母が御坂の家の広い日溜りの縁側で糸車を廻していた「あの頃」そのままではないか。ゼロ感覚とはまさにこれ、自分の原点、そのまた以前、まだ自分がこの世に固まらぬ世界のような不思議なやすらぎ(風まかせ・一)。

三、日本最高の織物「越後と宮古」

さらに宮古上布についてつぎのようなくだりもある。

小千谷に雪晒しという冬の仕事がある。日本最高の織物が雪国越後と南国宮古というのが不思議な取合せであるが、この両地の風合いは何処にも真似られない。越後上布は朱の帯に合わせて和服のみが似合うけれど、宮古上布はとて自由なレイアウト可能に思う。クリスチャン・ディオール、ピエール・カルダン等フアツションショーの風に舞うドレスでも軽しいし、キチンと和装でフレンツェの

石畳をスツと歩いても似合う(十)。

宮古上布については随所で明記しているが、読谷村の工芸館で「花織」等の説明を聞き、「真南風の会展のカタログ詩『清ら布』を求めたあとのおくだりで、「宮古上布の藍下地恵康氏の着物の五点、息をのむ美」とも記している(二九)。宮古産業まつりの「宮古織りデザインコンテスト」で「高校に宮古上布の基礎学習がある」ことを「頼もし」く思い、高校生の入賞作品を「シンプルでリゾート感覚」と評価し、一般の部では、宮古上布をまとった美女が「パリ・コレ」に出場し、「世界が広がってゆく」ことを想像している(三四)。いまなお「青春」のままの著者である。

四・宮古島市総合博物館

一九八六年の暮れ、著者は気管支を痛めて東京・三田の病院入院した。七階の病室は四人部屋で、著者は東京タワーの見える窓際、隣が新国劇の辰巳柳太郎の夫人である。正月で相部屋の他の二人が帰宅したあと、二人は大いに意気投合する。そこへ夫人のもとへ二人の見舞い客が現われる。島田正吾と緒方拳である。話題はもっぱら新人の頃の思い出。「ボクなんかゲンコツでポコポコやられましたからネ」と緒方拳。「まったく師匠はキビシカッタ」と島田正吾。「楽しそうに聴いてうなづく」夫人の傍らに著者が居たのはいうまでもない。そのころの著者は、青山の「シナリオ・センター」に通い、四九本もの習作ものになっている。講師陣には、若いころの新藤兼人、倉本聰、山田太一らがいたという(二七)。もとより著者も若かったのである。

このように記していたら際限もなくつづきそうなので、宮古島市総合博物館で区切りとし、あとは割愛したい。「天井画の『渦』へ手を打ってみた。一回目が空広で、二回目が真佐久のように逞しい響

きが還ってきた」「扁額コーナー」では『太平山』は心全体が浄化されて平和、尚順男爵はご本人の風姿に似て優しく、毎回ドシーンと波濤の響きの如く逞しく魅力的な冊封副使徐葆光の『中山第一』は計り知れない大人物の風格」と、宮古史(琉球史)のなかにしっかりと存在しているのである(三四)。

五・宮古は終の住処

著者は行きずりの旅人ではなく、「宮古史」はもとより「琉球史」にも明るく、宮古を終の住処に、「散骨」まで心づもりしておられる。それでいて今も「青春」そのものである。本著は十二冊めの著書という。

(「宮古郷土史研究会会報」二〇六号、二〇一五・一・一四)

10・南ふう「花水木」

書名の「花水木」四姉妹の影を追って」は、著者の母トヨ子の遺品、ブローチ「花水木」の「白い四枚の苞(ほう)」に母らの四姉妹を重ねているという。一家系の姉妹の展開でありながら、大河小説の感を抱かせる壮大な著書である。

出発点は宮古だが、古琉球、時として古代日本から、近・現代までを縦軸に、県内外はもとより、かつての日本の植民地、台湾・満州、さらにはアメリカまで広がっている。与那覇勢頭豊見親に始まる白川氏の佳麗な家系と、四姉妹とその連れ合いの関わる様々な有名無名の人脈の織りなす展開は、この小さな宮古がさながら大陸の感を抱かせる。著者の筆力のなせる技であろう。

1. 白川氏「東川根」

主題は、祖父恵章と、その四人の娘たちであるが、恵章の祖父恵忠は、白川氏十二世恵政に始まる「東川根」の出で、近世末期から

近代にかけて頭職(大首里大屋子・大親)を三人も出している。恵草(平良)・恵玉(平良)・恵忠(砂川)とつづく、「権勢のあつた家柄」(稲村賢敷「宮古島庶民史」一九五七)である。

二〇一四年、父渡久山寛三の十三回忌・生誕百年を記念して、「生涯を小説風にまとめた小さな冊子」をつくったことで、四女・母トヨ子の親戚から「今度はお母さんのも書いてよ」との要望がでて、それならば「母だけでなく母の四姉妹について書きたい」と思いはじめる。「第一章 形見のブローチ」に始まって、第二章 長女カナ、上里忠信に嫁ぐ、第三章 次女菊、宮島隆に嫁ぐ、第四章 三女ハル、仲松恵爽に嫁ぐ、第五章 四女トヨ子、渡久山寛三に嫁ぐ、第六章 大それた寄り道、第七章 すべてのつながり、と展開している。

2. 「女学校」卒

恵忠の孫・恵章が四姉妹の父である。一八八三(明治十六)年生。数えて二十歳で二歳上の高江洲ンギヤツ(貞子)を娶る。四姉妹をなしたあと、一九三二(昭和七)年、病いで貞子を失い、数年後、川満ホナと再婚し、さらに四男一女をささずかっている。四姉妹は明治末期から大正初期の生まれだが、当時の宮古では稀有であろう、四人ともに小学校はおろか女学校を出ている。

本人の資質・努力もさることながら、恵章・貞子の見識を示すものであろう。死の床にいた貞子は四姉妹に「まだ小さい子を残して亡くなる母親もいるのに、あなたたちはみんな女学校を出ているのだから、幸せなのよ」と言ったという。恵章は、宮古、那覇、台湾等で職についているが、壮年期は長く専売局に勤務している。

3. 台湾を舞台に

長女カナが一九〇四(明治三七)年一月出生後、恵章は那覇へ出て

いる。カナは女学校を卒えたあと、県立一中を出て教職にあつた上里忠信に嫁いでいる。夫婦は渡台し、本籍を神戸に移して、校長に昇進する。その後カナは病いを得て、一九四〇(昭和十五年)年十月、宮古で死去している。三七歳。

次女カメ(菊)は一九一〇(明治四三)年那覇で出生。県立高等女学校を出て、公務員の宮島隆(小禄玄昌)に嫁ぐ。隆は一中卒業後、渡台して教職についたあと、改めて中央大学に入り、卒業後は通信省に入って、東京、埼玉、京都、台湾と転勤。敗戦後は長崎に引き揚げ、最後は国税局で終わっている。菊は二〇〇八(平成二〇)年死去。

三女ハルは一九一三(大正二)年那覇で出生。父とともに渡台して、基隆高等女学校を卒えて教職につき、一九四〇(昭和十五年)年、一中から日本大学を出て東京で裁判所勤務の仲松恵爽に嫁いでいる。その後の渡台時期は定かではないが、引き揚げは一九四六年四月、渡久山一家と一緒にである。一九四七年九月、弁護士を開業、一九四九年十一月宮古裁判所判事、一九五一年四月米軍政下琉球司法界の最高機関であつた上訴裁判所判事、さらに首席判事を十二年任命されている。ハルは首席判事夫人として「琉米親善」の沖縄国際婦人クラブの副会長をつとめ、夫婦ともに国民指導員として米国視察に派遣されている。

恵爽の父恵知は県知事任命の初代平良村長、「宮古史伝」の著者・慶世村恒任は従兄。「二・二六事件」の亀川哲也も縁続きである。

4. 要職歴任の寛三

四女トヨ子は、一九一五(大正四)年那覇で出生。長身でスポーツ万能、女学校を出て教職につき、一九三九(昭和十四)年、渡久山寛三に嫁ぐ。寛三は沖縄師範を出て教職について、大連に向、結婚後、日本大学経済学科に入り、卒業後は台湾総督府、戦後は宮古支

庁商工水産課長、琉球銀行調査課長、沖繩商工会議所専務理事、臨時中央政府主計課長、琉球政府会計検査官、退官後は琉球工業連合会専務理事、極東放送理事長と要職を歴任し、その間には沖繩戦後史に大きな足跡を残す比嘉秀平、大田政作らとの交流もある。「極限の沖繩戦」「島燃ゆる宮古島人頭税廃止運動」ほか多くの著書でも著名。トヨ子は雑貨店経営、保育園長等で寛三を支え、一九七九年十二月病没、寛三はその後再婚して、二〇〇二年九月死去している。
 (「宮古郷土史研究会会報」二二七号、二〇一八・七・一六)

11. やどやま彩「宮古諸島の歳時記」

かつて宮古民話の会や宮古ペンクラブの事務局をあずかっていた、んきやーん塾のさどやま彩さん(佐渡山政子)がこのほど「宮古諸島の歳時記」を出版した。句集「地の貌」も収録されている。

「歳時記」とは「俳諧で季語を分類して解説や例句をつけた書」(広辞苑)とみなされているため、季節感のとぼしい宮古地域に限定しての句作は困難とみなされているようだが、著者はそれを十分承知の上で、「歳時記」とはその地域や島々の季節と暮らしに添うものであって、自分の住んでいる場所で詠むことが望ましい(「はじめに」との師の言葉に感銘しての挑戦なのだ)と明記している。一月から十二月まで月ごとに、宮古地域で一般的に知られている様々な行事や季節のいろどりを例示した上で、末尾に例句と、関連する写真を掲示している。次のとおりである(例句は冒頭に移す)。

1. 「歳時記」

○一月(製糖期見降ろす塔の孤高なり) || 新元旦、若水、甘蔗刈り、旧正月、アーサかき、ポーの実採り、島番鷹、寒緋桜、琉球小菫、ヤブツバキ、セイロンベンケイ、野蒜、御願解き

○二月(すずめうり風と戯る夕暮れどき) || 節分、立春、ジュールクニツ、日脚伸ぶ、トスビー祝い、雨水、春一番、黄砂、アマサギ
 ○三月(ぐみの実のふつと吐く種の虚言か) || うりずん、ハマダイコン、ザウカニ、シマヤマヒハツ、シمامン、フチャナ、明けもどろ、カジローイ、朝鮮朝顔、ティカツ、草ゼミ、マーニ、蒲葵の花、水雲
 ○四月(ちりちりと眠れぬ夜や花おうち) || デイゴ、ナーパイ、ムスヌン、サニツ、テツポーユリ、穀雨、潮干狩り、鳥帰る、ガイチン、ノゲイトウ

○五月(梅雨空に蘇鉄の雄株突きささる) || 鯉のぼり、梅雨、サニン花、ヤーンブ、復帰記念日、豊年星、白蟻、ヌスピガーラ、苦瓜、糸瓜、冬瓜、想思樹、福木の花、鳳仙花、蘇鉄、照葉木、龍舌蘭、ウミガメの産卵、カントウユン、ビークン

○六月(通り池うりずんの藍映しおり) || 梅雨明け、ティンバウ、若夏、熱帯夜、蝉、南風、ハーリー、鳳凰木の花、ゆうなの花、沖繩忌、蜥蜴

○七月(日向ぼこ縦に居を張る女郎蜘蛛) || 夾竹桃、水母、夏祭り、野ぼたん、台風、土用浪、宮古上布、芭蕉布、ぱさぎん、泡盛、クロトン、パイヤ、炎天、早魃、摸忌(七月十九日)

○八月(暮れなずむ潮汲み場辺アダンの実) || 福木の実、蕃寿榔、阿旦の実、旧盆

○九月(向日葵やわれよわれよと太る夏) || 多良間島の八月踊り、ジュウゴヤ、白露

○十月(実月桃石敢當を庇いたる) || サシバ、ユークイ、ミヤークツツ、ヤーマスブナカ、ンナフカ、島尻のパーントウ
 ○十一月(天地人誰が名付けた天人菊) || トックリキワタ、十月夏がま、甘蔗の花、扇芭蕉の花、椿、石路の花、狸々木、ブーゲンビ

リア

○十二月(ハマダイコン今朝の客はみつばちさん) 〓 四温晴、冬至寒、南哲忌(十二月二十八日)、年用意

2. 俳句との出会い

著者と俳句との出会いは、一九八五年、地元新聞社につとめていたころ、俳人の真栄城いさを氏を取材したのが契機のようにある。季語の明瞭な「歳時記」に疑問をもったとき、「自分の生まれた所、住んでいる位置で季語を考えたらよい」(「俳句との出会い」)という師の言葉が、著者の俳句への開眼である。

その後、「宮古島の神と森を考える会」の初代会長で、一九六九年以来一九八六年までに早くも数十回も来県している(「南島論序説」)民俗学者で歌人の谷川健一氏に激励されて、俳句は、「文学であると同時に暮らしの文化だ」と受け止め、一層精進したもようである。後半の「句集 地の貌」は、二〇〇一〜〇九年の「藍の会」、二〇一〜一九九九年「麻姑山俳句会」に参加しての作品群で、年度別、月ごとに収録されている。次に年一句ひろいあげてみた。

3. 句作のあゆみ

二〇〇一年十二月「流星を手に入れんとす冬の涛」、二〇〇二年二月「如月や野良着重ねて甘蔗畑」、二〇〇三年六月「宙悲し地上の諍い沖縄忌」、二〇〇四年三月「群待つや電信柱のはぐれ鷹」、二〇〇五年十二月「冬の月闇の子宿し神女の列」、二〇〇六年五月「クロツグの実の弾ける小道かな」、二〇〇八年一月「寒椿ほかりほかりと語りだす」、二〇〇九年七月「あかあかと岩礁のあけて海開き」、二〇一一年一月「甘蔗時雨確と立ち居り老夫婦」、二〇一二年五月「ムスヌンや虫は沖にて再生す」、二〇一三年五月「野はみちて月桃・百合の花盛り」、二〇一四年七月「台風の夜訪う者もなし独り寝る」、

二〇一五年六月「指笛の飛び交う港爬龍船」、二〇一六年七月「スマフサラ縄の惑いて骨は空」、二〇一七年八月「雨乞いや裸足の女士を蹴る」、二〇一八年十月「黒潮に夕日まとい鷹の来る」、二〇一九年九月「島燃ゆる台風一過砂漠なり」

4. 「俳句の森」の散策

「はじめに」では、本著は「未来を担う子供たちへ」句作に役立つことを希望して、「さあ、あなたも俳句の森を散策してみませんか」とのよびかけも明記されている。著者の生まれ育った宮古への熱い思いに根ざす句作と、「歳時記」に託した願いを示しているのであるうか。(「宮古郷土史研究会会報」二四〇号、二〇二〇・九・一四)